白城会通信

Si. Imai

No. 9

ご挨拶

校長　豊岡正見

学校の近況をおしらせすることでご挨拶にかえます。外面的なものでは北校舎の東端に理科棟がたちました。そろそろ授業がその方へうつりつつあります。ただ理科棟という語はいささか大げさでして、実のところは定時制の城北高校の生徒集会所が国の費用で建ちますのに便乗して県費で本校の理科室を上積みしたというにすぎません。この場所は本校に残されている唯一つの用地ですので、本校だけのものを建てたかったのが本音でしょうか。

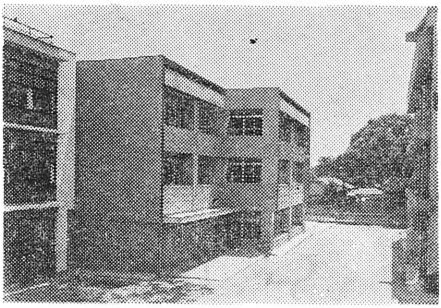
大学への進学は東大、京大、阪大といった大どころが増え、その分だけ神戸大が少くなったということです。だから表面的には今年はとても成績がよかったという評価はうけています。東大で神戸高10、長田高0、本校9京大で神戸高44、長田高11、本校34。阪大が神戸高56、長田高23、本校21、神戸大が神戸高87、長田高66、本校59といったところ。学級数が両校10学級、本校8学級ですので合格者数だけでは比較は困難ということになりましょうか。

中学からの入学者は定員を割りました。あまりオーバーして試験地獄を現出しても困りますが、少いのも些か淋しい想いです。その分だけ精選された子が入っているともいえるでしょうが。

さて47年度の計画に話をうつしましょう。二つばかり主だったものをあげてみますと、一つは環境整備をいそがねばならないということです。本誌の第8号に賀集先生が現在の校舎の改築の苦心談を昔なつかしくおかきになっていますが、世の中は三日見ぬまの桜で市立高校が立派になり、東高も整備され、南高の改築も目前ということになりますと、戦後早々の建物では、何といっても不満が目立ちます。「君んとこは何かにつけて整っているから」というのが、本校が予算を十分もらえない理由づけで、とくに県の財政がひっ迫している折柄、本当は整っていたのは昔のことで、今では、苦しきことのみ多い本校の現状などなかなか諒解してもらえそうにありません。愚痴はさておいて計画としてはむかしの校舎を移した格技場と城北の理科室と、その西の倉庫をとりつぶして四階建ての校舎を建てたいと思っています。上の二階は城北の普通教室8つ、下の二階は本校の不足分の補充といったところ。さしづめその第一歩として本年度はその一角に運動クラブの部屋を計画しています。

第二は文部省の教育方法研究指定校に県下では唯一つ本校が指定されたことです。教育機器を借してもらえるので、欲につられておうけしましたが、考えてみるとこれほどむつかしい、また、生徒にも先生にも役にたつ、現代の教育課題を担った仕事はめったにありません。二か年にわたって、あまり肩の張らない、見世物的でない、実質的な教育方法の開発を西高の名のもとに考えてみたいと思っております。

紙数がつきましたので擱筆いたします。みなさまのご健勝をお祈りいたします



（新理科室）

姫路西高等学校教育の思い出

元本校校長　賀集音市

一　はじめに

私は本誌前号に、姫路西高等学校建築の思い出を書いたが、あれは建築と言う教育の場を造ったことであって、本当の教育に就いては何も触れていなかった。学校建築と教育とは無関係ではないが、又別の問題である。私は建築のために多くの勢力を費し、生徒の教育については、自分の理想を実現することが出来ず、心残りのする所が多かった。今その懺悔を識し、当時の生徒を始め、卒業生各位に深く謝する次第である。

二　姫路西高等学校の伝統

姫路西高校は姫中の時代から、天下の秀才の集る所であり、英才教育の場であった。しかも主知的な我利勉ではなく、全人教育として幅の広い人材の養成に努められ、社会の各層に於て、指導的地位に立つ人が数多く輩出された。この伝統が歴然と生徒の上に現われ終戦後の混乱にも拘らず、整然と教育が行なわれていた。私は前任の各学校に比べ、生徒の態度に確然たる相違のあることを認めた。しかしその反面大学入試と言う、重い責任を負わされているので、その責任を果すべく、常に努力しなければならなかった。ここに真の教育の理想と現実の問題との間に、相当の距離のあることを痛感した。これが私の最も大きな悩みであった。

三　私の教育意見

私は日本の教育については大いに努力もして来たし、一つの私見も持っていた。昭和六年に「生命哲学を根拠とせる、全人教育の原理と実際」と題する著書を公にし、真の教育の行くべき道を述べたのであるが、その大概は生命の神秘霊妙な働きを基本原理とし、その動的な自為創造の作用を教育の方法的原理としようとするものである。即ち、動機ある自律創造の教育、個性と人間性を尊ぶ教育。豊かな情操に富む社会活動による教育であり為すことによって学ぶ作業中心の教育であり師弟同行、魂と魂の触合う実践窮行の教育であり、筋骨を労して身心を鍛える鍛練主義の教育である。又同じ頃、「大正期に於ける世界の新学校」と題する小著を公にし、新教育を提唱して、自由教育、自由進度、クラブ活動等の新教育を実行した。その為、戦前には自由主義者とも見られた。戦後は急激に新教育が提唱されたが、あんな薄ペラなアメリカ教育の模倣には極力反対し、これは新教育ではなく、一時的な、戦後教育であると看做し、兵庫教育誌（昭和二十八年二月号）に戦後教育批判と題する論文を掲載し、戦後教育を酷評した。

しかし、私の教育意見は戦前戦後によって余り変っていない。常に一貫しているのであるが、戦前は自由主義者といわれ、戦後は国粋主義者とか頭が古いかいわれた。けれども現在では、教育学者も漸く真の日本教育に醒め、日本教育の美点を復活し保持しようと考える様になった。要するに私の教育は「自然を楽しみ、人類を愛し、国家社会に於ける自己の位置と責務とを自覚し、遂に全宇宙に対し、崇高温和なる情操を感得し、これを敬いこれを尊ぶ。」と言う、野口援太郎先生のお説を実行せんとするのである。これは所謂、神なき宗教とも言うべきものであって、教育

はこの境地に到らなければならぬと信じている。

四　現実に対する私の悩み

しかし右の説は私の理想であって、高等学校、特に姫路西高校ではこの理想の教育を実施することは困難であった。ここに私の大きな悩みがあった。

第一、現在の高等学校の教育課程は余りにも実際を離れ、観念的であり、論理的であり程度が高く、量が多すぎる。現在の高校の全課程を真に理解し得る者は二割であるというが、いくら西校の生徒でも一〇〇パーセントの理解は到底望めない。理数科等、自然科学の方面はもちろん、文化科学的方面でも、極めて程度が高い。二年生を対象とした「人間性の理解と人生観の確立」という課程でも、東西古今の先哲偉人の名称や学説が二百名近くも出ている。人生観は知識ではない。自分の体験と共感から、試験を楯に、棒暗記させるに過ぎない。従って、教科課程を思い切って削減し、共に語り共に批判し、体験し、共感にまで導かなければ、真の人生観とはならない。しかし公立学校と、今の制度ではそれが出来ない。これが悩みの根源である。

第二は大学入学試験である。本校の殆んど全部が大学進学希望者であり、この希望を遂げさせることが最大の責務であり、真の教育はさておき、大学入試だけは合格させねばならないのである。大学入試を根本的に改革しなければ私の理想を実現することは到底出来ない。止むを得ず頭デッカチの奇形人を作るより外はない。これを辛抱強く勉強している生徒を見れば可哀そうで涙が止めどなく出る。何とか出来ないものだろうか、「西高の生徒諸君よ、それまで、今暫く辛抱してくれ。」と祈っていた。そして両者の調整に極力努力したのである。

五　現実に処する私の施策

全人教育と大学入試との板ばさみとなった私は、情操教育、作業教育等は校長が主体となってやる学校行事及び諸施策によってこれを補う様工夫し、生徒及び先生方はその方面には余り精力を使わず、専ら、学力向上に精進してもらうこととし、協議や職員会も極力制限し、教頭や部長との話合で万事進めることとした。この点はあるいはワンマンの誇りを受けたかも知れないが止むを得なかった。これは決して私の本心ではなく、今のところ最善の方法であろうと考えたのである。

一　講堂講話　多くの校長は講堂訓話と言って、よく勉強せよ。校規を守り規律正しい生活をせよ。等と言うのであるが、私はそんなことは一度も言わなかった。本校の生徒はそんな必要もなかった。私は少しでも入学試験に役立つ話をと思い、私の教育の基本的態度の外は主として、時事問題、思想問題、我が国の主要国策等について話した。しかし今から考えると少々難し過ぎたのではないかと思う。生徒には寧ろ慰安になる様な話をすればよかったかとも思っている。私の教育の基本的態度としては、愛国心、開拓精神、正道を強く進む意志の鍛練の三項であった。当時は未だ進駐軍の命令の厳しい時であったが、堂々と愛国心を主張した。愛国心とは、民族愛、文化愛、国土愛の三つである。日本の民族は日本人が愛さないで誰が愛して呉れる。日本の文化は日本人が愛さないで誰が愛して呉れる。日本の国土は日本人の幸福の為、寸土を惜んで開拓せねばならぬと説いた。しかし、在来の日本人文化は総て戦争に導く罪悪の根源の如く言っていた当時であったので生徒にも一般人にも容易には受入れられなかった。次に開拓精神とは、努力奮闘、困苦欠乏にたえ、自己の運命を開拓する勇猛心であり百年足らずしてアメリカ大陸を開拓したアメ

リカ民族の張硬な意志力を学ぶべきで、浅薄なアメリカ風を模倣すべきではないと主張した。正道を力強く進むことは、ある欧州人の「日本青年よ正道を通れ、正道は人生の最も近道である。」との言葉を紹介し、正道を通るには非常な努力を要することを説いた。その他は主として時事問題を話したのであるが、ある年の新年始業式の日、日本の国土開発の話をしたが、職員からも、校長はなぜあんな話をするのだろう等と言われたことがある。又社会科は社会生活を通して、社会性を養うべきもので、現在の如く社会を批判するのが任務ではない。社会を批判する以前に先づ自己反省をすべきである。それでなければ社会科は最も非社会的な学科となる。と言って、社会科担任教師からえらい反撃を受けたこともあった。しかし今になって見れば、私の言ったことに少しも誤りはなかったとの自信を持っている。

二　アッセンブリー　総合的、社会的、自己表現的課程であり、共同生活により情意の陶冶を図るのが目的である。しかしこの為には、生徒も教師も多くの時間と精力とを要する。それで生徒に負担をかけずしてその効果を上げる為、毎週一時間ずつ、吾々の方でこれを実施し、生徒は楽しみながら情操の陶冶と芸術的批判力を養うよう工夫した。相当経費を要したが、文士を招聘して講演を聞く、あるいは淡路人形座を聘して実演し、あるいは狂言師を聘し、流行歌手や神楽を聘し、先輩卒業生の講演を依頼し、生徒自身の弁論会を催し、あるいは合同体操を催し、週一時間を楽しく過させた。又運動会等も出来る限り面白い一日を過させるよう、仮装行列、民謡踊、等もやった。デコレーション等も寧ろ奨励し、様々な催しをやらせた。反対の意見もあったが、平素難しい入試の詰込教育を受けている者には、思い切って発散させる場を作った。平素教室では下積になっている生徒も驚く様な活動をする人物が出て来る。そしてこれが終れば、早速勉張に頭を切り替えさせた。

三　環境の整備　環境は人を造る。環境を美化することは、人間の性格教育に極めて大きな影響がある。しかしそれが為に生徒に時間と精力を消耗させることは出来ない。当時古い校舎や校庭を美化するに、私と用務員（小使）と人夫とでやった。学校は校長と用務員とで管理するのが私の方針である。若い用務員を入れ、直接指揮して随分仕事をやってもらった。一時は「校長は形式ばかりを尊ぶ職員よりも植木の方が可愛いんだそうな」などと評する者さえあった。しかし一ケ年程で整備も完成し、そんな声も全くなくなり、生徒もよく理解し、芝生を踏んだり、枝を折ったりする者は一人もなくなった。又古い校舎の作法室に額を掛け、軸をかけ、新校舎の出来た部分に絵画や塑像をおいた。不知不識の間に生徒の情操も高まるであろう。更に小鳥の小屋も作った。「高等学校に小鳥小屋か」と言うものもあったが、女性達や園芸部の者は喜んで餌をやって可愛がってくれた。又園芸部を奨励し、花の鉢を作り、職員室の各自の本立の上に置かせた。学校中で一番不整頓であった職員室も整然と整理され美しい花が咲いた。こうして情操教育には努力した。

六　職員各位の労苦

一、教頭の苦労　私は教頭の経験がないが、随分難しい仕事であると思う。柴垣氏はこの難しい仕事を完全になし遂げた。窮屈で片意地で頑固な私のやることでも、ただの一度も反対されたことが無かった。私はこれまで六人の教頭と仕事を共にしたが、本当に頼り甲斐のあったのは柴垣氏一人である。生徒や職員に対しては相当手厳しい様であったが、又

なかなか融通のきく点も多かった。校内の出来事や噂など、こまごまと報告してくれたので、私の仕事に対する反省の機会が出来て幸であった。かって「教頭の仕事が非常に多い校長の留守の時も度々ある。それに授業時数も多いので、教頭の授業時数は何とかならないでしょうか。」とのことであった。それに対し私は「もっともなことで、教頭の仕事も非常に忙しいと思うが、授業だけは是非ともやって欲しい。」と言ったが素直に受け入れられ、その後は何とも言われず、忙しい教頭の仕事と授業とを兼ね大いに努力された。私の考えでは、教頭が教室で授業をしなければ生徒の本当の気持をつかむことが出来ないであろう。校長も教頭も直接授業しなければ、全く生徒から離れてしまう。それで是非授業をやってほしいと言ったのである。しかし今になって見れば、無理なことを言ったと後悔している。

二、大学入試に対する先生の苦労　世間の人は姫路西校は頭のよい生徒ばかりを集め、楽々と授業が出来るが、頭や性格のよくない者を集めた学校の苦労は全く知らないであろうと言う。しかし、決してそうではない。第一毎日相当程度の高い授業をせねばならぬ。教材の研究だけでも容易ではない。それに大学入試という重い責任を負っている。その為には補習教育、模擬試験、比較考査、臨時考査定期考査と試験を繰返し行う。その都度、先生は先づその前夜徹夜で問題を作る。試験後は徹夜で採点し、翌日点数を出し成績序列を作り発表しなければならない。大学進学の頃には、進学校の決定に、一人一人に随分と研究や作戦をせねばならぬ。更に一人三校位は受験するので、内申書を担任の分だけでも千五百枚は作らねばならぬ。これ等の書類に受験料を添え、発送させるまでには容易ならぬ心労がある。特に余り成績のよくない者や段々下る者の督励は実に深刻なものである。職員室へ生徒を呼び「どうして勉強せんのだ。お前達のような勉強で大学へ這れたら僕は逆立して歩いてやるわ、しっかりやらんか。」と、生徒は頭を下げて聞いている。「しっかりやれ。」と叱って帰すが、後で先生は、ひそかに涙をふいている姿を見ることがある。私達も、なぜこんな悲しい場面を見なければならないのかと、共に涙を拭うこともある。色々な苦労が度を越す為か、私の任期の前後四人の結核患者が出て、休職となった。これも我々の責任であると反省している。西高校の教育は決して容易ではない。

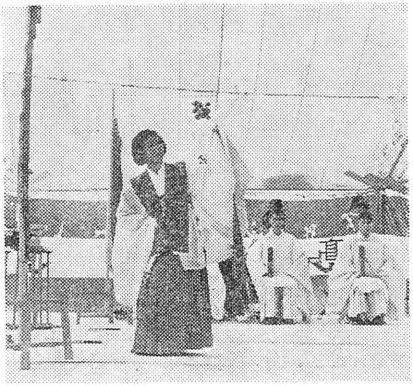
三、先生の修行　各先生は重大な責任を負っているから、専門的職業人としての技術をしっかり身につけねばならない。新しい高師又は大学の卒業者を採用した時は、「君達は向う五ケ年は学校はどちらを向いているのか、どんな仕事があるかは一切考えないでよろしい。しっかり専門学科の勉強をして欲しい。その後の五ケ年は、授業の外に学校にどんな仕事があるかをよく見習って欲しい。十年たって始めて一人前の教師になれるのだ。」と言って、最初は学級担任も仕事の分担も余りさせないことにした。中には卒業すれば大いに活躍し、学級担任もして新風を吹き込みたいと考えていた者もあったであろう。随分不平を持った者もあったようであるが、私は断乎これを実行した。そして授業を参観し、声の大きさ、早さ、白墨の持ち方、板書の仕方、指名の仕方、態度等詳細に見て当人の長所欠点を一覧表にして渡し修行させた。若い人は早くから有名にならず、長期計画を立て、じっくりと修行を積んで欲しい。当時は苦しくもあり腹もたったであろうが、今になって大変有り難いことであったと言ってくれる。

四、工作美術の公開授業　県も少々皮肉であ

ったのか、姫路西校に工作美術の公開教授をやれという。私は喜んで引受けた。平素やっていることをやればよい、と。平素の作品を出来るだけ多く陳列し、工作の授業も製図から実地工作をやってもらった。県も参観者も全く驚き「姫路西校でこんなに美術工作の授業をやっているとは全く思っていなかった」と、多分大学入試にのみ没頭し、作業教育などてんでやっていないものと思っていたらしい。しかし立派な工作の先生もいるし美術の先生もいる。決った課程だけは完全にやっているので、決して不思議でも何んでもない。しかるに世の中の人は姫路西高校をこんなに解しているのは誠に残念であった。

五、和敬静美の精神　和敬清寂は茶道の精神であるが、和敬静美は本校の表面に出さない大きな特徴である。本校を参観したある先生は、「何と静かな学校ですね。」と言って感心しておられた。和と敬は必然的に静であり美である。職員会等でも、常に協調的であり殊更に過激な議論を吐いたり反抗的な言動をするものは一人もなく、私がその調整に困ったことも一度もなかった。和と秩序と静の中に終始した感が強かった。この点は特に幹部諸君の人徳の影響であると常に敬意を表していた。この和の精神に羽含まれることが、情操教育に最も肝要なことである。

私の常に気を使っていたのは、この稿でも繰返し述べた通り情操教育に欠陥があってはと言うことである。しかし和と敬と静の中に養われた美の精神はクラブ活動の中に明かに表現されていた。本校としてはクラブ活動に余り多くの時間をとらないようにと思っているが、頭のよい生徒はやはり情意の働きも微妙で僅かな時間で随分広く活動している。器楽部、声楽部、謡曲部、文芸部、演劇部、茶華道、写真放送部等を始め、体育各部を合せ五十部のクラブがあり、何れも指導の顧問先生を中心に熱心にその道に精進した。専門外の芸道に夜おそくまで練習指導に励む先生達の苦労も大変であったと思う。文化祭などに演出される諸芸能を見る時、何時、何処で稽古したのだろうと感心させられる所があり、何れも品位の高い芸術的なものであり、静中動の美の表現である。又ハイワイクラブの生徒が朝早くから登校し、校門校庭の落葉を美しく掃き清め、他の生徒の登校を迎えるとか放送部が、愉快な音楽を放送して登校生を迎える等、美しい態度も見られ、我々もこれ等の人々の努力に敬意を表しつつ、登校したものである。こうしたクラブ活動もあの古い校舎では、部屋も練習の場所もなかったので、せめて経費だけでも出してやればよかったのにと後悔している。しかし本校生徒の心情の豊かさは、決して心配するには及ばない。少しの時間を与えれば十分その能力を発揮する可能性のあることを実証したのである。

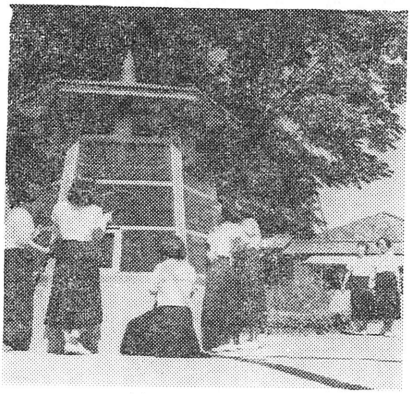


（神　　楽）

六、出藍の誉　西高校の先生は皆頑張りが強く、よく勉強する。これが自然報いられ、校長などの管理職に栄進される者が多い。我々と同勤していた者で、校長となられた者が十一名、教頭が四名、指導主事が三名、短大教授が一名あると思う。既に停年退職された者もあるが、何れも新進気鋭の校長として活躍し、兵庫県の教育界に大きく貢献している、全く感謝の限りである。水の流れと人の身はと言う言葉の如く、西高校の職員も、次第に栄進又は勇退し、我々と同じ時代に働いて呉れた人で、今尚残って居られるのは十三名である。これ等の方も、近々栄進されることであろう。大いにその日を期待している。しかし、斉藤武一郎、梅沢武雄、大西正一、山崎為人、伊藤まことの諸氏を失ったことは返すがえすも残念なことである。

七　商業科の施設

商業科は進駐軍の命令で無理矢理に置いたばかりで、教室とタイプライターがやっと出



（小　鳥　小　屋）

来た所であった。しかも大学入試偏重で商業科は軽視せられるのではないかとの心配もあった。しかし私は前述の通り、本当の教育は実業教育にあると考えていたので、商業はむしろ重視した積りである。出来る限りの作業化、労作化、実際化し、真に役立つ人間を作ろうと考えた。先づオート三輪車を購入し、自動車学校の教師を招聘して運転の教授をし在学中に運転免許状を取らせることにした。小使に免許状をとらせ、それを助手とし、校内のコースで練習させ、相当多数免許をとった。タイプライターの教師も雇い毎週練習させ、更に謄写印刷の教師も雇い、美しい色彩の印刷もやらせた。今であったら計算機、電子計算機も購入していたと思うが、当時は未だ開発されていなかった。私は本当の教育は実業教育であり、農学校等は特に教育の場として最も好適であると思う。

八　家庭科学研究室

家庭科は女性のみによって経営されているのであるが、非科学、非能率な点が非常に多かった。家庭科は被服と共に技術の向上を図るのであるが、能率心理学、作業心理学、人間工学等を活用し、大いに科学化する必要がある。最近その点が非常に発達し、生活科学センター等の施設も出来て急速に進歩した。しかし今から二十年も前は全く研究されていなかった。私はその点を重視し、家庭科学研究会を設け、生活用品を多く蒐集し、分析、比較、検討して合理化し、又家庭用具の保存陳列等も大いにやる積りで特別室や陳列棚まで作ったが、一般社会はまだそこまで進んでいなかったので、成功するに到らなかったのは残念であった。

九　女性教育の特質と振興

男女共学になって以来、自然女子教育を軽視する傾向があった。男女は共学であって同学ではない。女性には女性特有の教育があるこれを以って女性を軽視するものだと考えることは大きな誤りである。私は卒業期には女性のみを分離し、女性の特質（女性原始説）母性の尊厳、女性心身の特徴、性の原理、恋愛、結婚、夫婦生活、良妻の心得、舅姑への心遣等を数時間かけて話した。生徒も非常に緊張して聞いているようであった。卒業後、学校で色々のことを習ったが、忘れてしまったことが多いが、卒業前の校長の話だけは覚えている、と言った生徒も多かった。最近ますます女性の特質、美徳が失われつつあるのは誠に残念である。女性教育の振興を特に切望する次第である。

一〇　おわりに

姫路西高校は、世間が一般に思っている程楽な学校ではない。大学入試と理想の教育との調節に私も随分苦心したが、各先生も言い知れぬ苦心と悩みを持ちつつ、ただ一心に生徒のためにと努力を傾倒しているのである。これに対し我々は特別の報酬も慰労もしていない。せめて卒業式に際して、謝恩会でもしたいと思うが、入試間際で、そんな気分的余裕もない。卒業式当日、中食位は出し度いと思ったが、これも集る暇さえない状態であった。しかし先生達は一言の不平不満も言はず入試事務のため没頭しているのである。教員組合等の動きもなく、一途にその道に精進している。私はただ感謝の気持と懺悔で一杯である。どうか先生達、自重自愛、健康に留意して長生を保ち、彼等生徒の将来の発展を祈ってやって下さい。（完）

植樹報告とご挨拶

北沢　芳信
（前校内理事・姫東高教諭）

一雨ごとに緑が一そう目にしみる季節となりましたが、白城会の皆様、お元気のことと存じます。

私このたび懐しい母校を去り姫路東高等学校に転任いたしました。顧みますと、昭和二十八年九月、古い木造でつっかい棒のある校舎の時代に奉職して以来、旧姫中の伝統にはずかしくないようにとの一心で勤めているうちに、約十九年の歳月が流れていました。その間、諸先生、同窓会の皆様から、数々のご教示、ご鞭撻をいただき、大過なく過すことが出来ましたことを心より感謝いたします。赴任当時の佇まいは、今はその面影もなく、わずかに、格技場と卓球場を残すだけとなっています。それに代って、運動場の北側に白亜の殿堂が広峰山を背景にきわだっています中でも、他にその比を見ない同窓会館は、同窓生の集いの場として、そのきずなを密にしているのはもちろんのこと、在校生の教育の場としても利用されている立派な施設です。

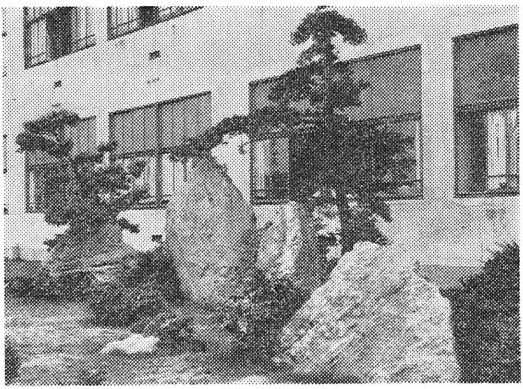
このように、施設、設備の整った申し分のない環境、とりわけ、一体となって教育に専念されている立派な先生方、良識をもった秀れた生徒達、この西高校で教鞭をとることができたことは、ほんとうに幸せであったと離れてみて、はじめて実感が湧いてきた次第です。この十九年間に得た多くの教訓、経験を生かして、兄弟校、姉妹校である東高校で、気持を新たにして努力する所存です。今後も在任中同様ご指導、ご好誼のほどお願い申しあげます。

さて、元西高校々長賀集先生は、かねて、本館南側の庭園の中ほどにある背丈あまりの庭石附近に植樹して、庭園の仕上げをしたいと念願されていました。ご承知のように、新校舎の建築に際して、校長在任時代は申すまでもなく、その後も、並々ならぬ努力でわが子のように気を配っておられたのです。

植樹計画につきましては、副理事長柴垣先生をはじめとして、校内理事西岡先生の尽力により、昨年八月十五日、白城会総会で募金いたしましたところ、会員の皆様の絶大な協力により、左記のように多額の浄財が集まりました。かくして、本年三月下旬、庭園に調和のとれた槙二本を、庭石の両側に植樹し「鷺山に秋」の応援歌碑とともに、一そう雅やかな姿を添えることになりました。紙上をかりて、関係の諸先生、募金に協力して下さった会員の皆様に厚くお礼申しあげます。

槙の木の成長とともに、白城会、西高校の発展、皆様のご多幸と、ご健康をお祈りしてご挨拶にかえさせていただきます。

募金額	一二一、〇〇〇円
預金利息	一、七五〇円
本部会計より借入	四七、二五〇円
植樹代金	一七〇、〇〇〇円



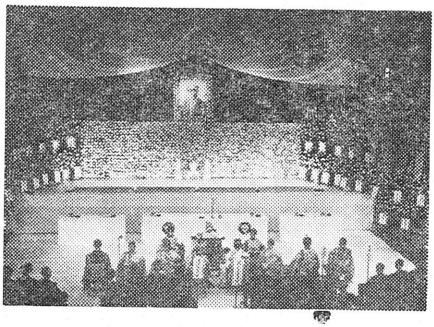
（槙の木）

安平康理事長の死を悼む

白城会副理事長
柴垣武夫（姫中34回）

本会理事長安平康氏が昭和四十六年八月二十三日午後一時四十五分永眠されました。謹んで同窓各位にご通知申し上げます。八月十五日の白城会総会には、お元気な姿をおみせになり、温容あふれるご挨拶をいただいたばかりなのに、突然ご長逝の報に接し私たちの驚き如何ばかり、ただただ哀悼と悲嘆にひたるばかりでした。そうそうと吹きはじめた秋風のなかに限りない淋しさと哀しみがどっとこみあげてきました。

思いおこせば戦後の学制改革、姫路中学校から姫路西高等学校への慌しい母校の変革期にあたり、同窓会「理事」「常務理事」「副理事長」さらに昭和四十六年からは「理事長」として約三十年の長きにわたり誠心誠意母校及び同窓会に尽されました先生のご功績は、その一ツ一ツをとりあげても申しのべるいとまもないほど大きく、はかり知れないものです。せめてもう数年、母校創立百周年の記念式典の日まで、先生にご健在でいてほしかったとの私たちの願いも、今はもう叶えられないはかない夢となってしまいましたが、私たち白城会同窓生一同はおよばずながら精



いっぱい先生のお志をつぎ母校発展のため全力を尽すことをここに固くお誓い申し上げます。どうかいつまでも私たちの足どりを見守って下さいますようお願い申し上げます。先生、先生はいままで余りにも忙しすぎましたどうぞこれからは安らかにお眠り下さい。

いま庭前の芙蓉が一りん崩るるごとく静かに散りはてました。天地の静寂は無常の人生をよそに宇宙悠久の青さを湛えております。

謹んで先生のご霊前に一句を捧げて永別の誄辞といたします。

散りたるは大きかりしよ花芙蓉

先生の内葬は八月二十五日自宅にて行われ葬儀告別式は山陽特殊製鋼株式会社社葬をもって、八月三十日姫路市公会堂に於いて、総本山金剛峯寺座主　高野山真言宗管長大僧正堀田真快師を導師に厳粛かつ壮厳にとり行われました。葬儀に参列した者みな先生のご遺徳を偲んで涙しました。

なお、先生の葬儀に際しまして、多数の同窓各位から寄せられましたねんごろな弔意にたいしまして白城会本部より厚くお礼を申し上げます。

山崎先生を憶う

西高教諭　橘　義康

（姫中58回）

まわりの人の切なる祈りにもかかわらず、遂に先生は逝ってしまわれた。昭和四十七年四月二十一日未明享年五十四才、急性の心臓衰弱による。教職に、俳句芸術に、また同窓会活動に、今生の命を傾け尽くして、頬こけ、腕細りつつも、尽くすべきことを尽くした人の安らいだ寝顔で逝ってしまわれた。よい人を失った――遺憾やるせないままに思い出の一端をつづってみよう。

昭和二十六年の春、私がはじめて母校の教壇に立って山崎先生とご一緒に文芸部、新聞部の顧問をしたころ、そして当時わが身の非才を顧みず一かど芸林に遊ぶ気取りに満ちていた私は俳人山崎為人氏を相手にしばしば芸術論を闘わした。敗戦を契機として日本文化を検討する気運が旺溢し、桑原武夫の俳句第二芸術論、小田切秀雄の「歌の条件」、臼井吉見の「短歌訣別論」などが続々あらわれ短詩型文学に対する風当りの強い時代であった。

議論は勢い私が俳句否定の側に立って先生を攻めるという立場にあったし、当時の気運としてそれは実に容易な道であった。守る側に立たされた先生は実に苦しかった。それでも先生は最後まで居ずまいを正して議論の中途で腰を折るということは絶対されなかった。――先生、きょうはこの位で止めましょうか。疲れましたね。――そうしますか。でも橘さん、元禄の昔に芭蕉という、ひとりの男がその道一筋に命を賭けて生きたんですよ。その生き方が全く、無意味だとは思えませんね。古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよ……も一度謙虚に芭蕉に還ってみることではないでしょうか。――

その後の先生はすでに議論する人ではなかった。信ずるに足るものだけを求めて創造する人に変身し、根強く俳句活動を展開しつづけられた。昭和三十一年、句集「漂鳥」刊行。昭和四十二年、同じく「幻花」刊行。先生の句には痛みとなって響く鋭敏さがある。見つめ尽くした者のみがもつ端正さがある。もう俳句をもてあそぶ人でなかった。その句は生きた日の証しに打ち込まずにはおられなかった道標であった。

パン色の雀へさむき空気銃
墓掘るも末枯るも世事眠るのみ
霧の銃眼ふかきを覗き誰も孤独

（以上「幻花」より）

いつしか「さむき空気銃」にねらわれる「パン色の雀」となって、既往未来の諸事すべて世事と化す灰色の霧中に「ふかき孤独」と対談されていたのであった。

野辺の送りをしなければならなかった日、白城会一同を代表して読まれた柴垣武夫氏の弔辞のなかに

水中に風白く椿ポトリと落つ

という先生の句が引かれていた。「椿」は先生の生涯を飾るにふさわしい花であったかもしれぬ。句集「幻花」の〝あとがき〟に述べられた先生のことばを掲載し、もって幽冥界に旅立たれた先生を偲ぶよすがにしたい。

三十四年の大手術後、片肺だけで八年を生きながらえてきた私に、残る生命がいくばくあるかを知るよしもないが、いまさら他へうつるには私はあまりにも俳句に深入りしすぎたようである。これからも、私は俳句を作りつづけてゆくほかないし、俳句は、私にとってはいつまでも見果ぬ夢であり幻といえる。私は自分の貧弱な作品を、自らの「生の証し」などと言いきる自信は毛頭ないが、少年の日の文学へのはるかな夢の幻影が辛うじてここに息づいているとの気はする。そして、同じ夢であり、幻であるとするならば、壮絶なくれなゐの花を咲かせてみたい、というのが私の念願であると。

先生、見果てぬ「くれなゐの花」を求めて、どこまでも安らかに旅していってください。合掌。

昭和47年6月11日記す。

身辺雑記

佐藤文太郎

（姫中51回）

寂寂山間一艸廬　薫風鳥語緑紅譽
知人有レ遠無二音信一　讀書親文擬二蠹魚一

そっとしておけと云ふてふ朝の蜘蛛剪りし

牡丹の上を動かず

木瓜、牡丹、石南花、満天星、黄連華、躑躅、皐月、石斛、岩鏡、晩春から次々我が家の花が咲く。庭に色々の小鳥がやってのる。診療室飾る皐月に見入る病人の顔の翳りの一刻消えて

草深い山間の陋屋にも初夏が訪れた。風鳥木花の楽しい季節だ。学友その他から忘れられた存在、無師独歩、浅学菲才の懐古骨董趣味?、画心を読み、拙絶駄句、腰折れ雑文を弄し、全で紙の虫みたいな、と自嘲していたら西岡学兄より、便りとともに原稿用紙が舞いこんだ。色々の分野に優秀な先輩、後輩、箒で掃く程おられるのは皆さん御承知のとおり。烏滸の沙汰。私のような田夫子の出る幕か、と学兄に抗議の電話も空しく、引き受けてはみたものの、何を書いて良いやら「ままよ」と思いつくまま恥と雑文を重ねてかくことに決めたら、そこは田舎漢の図太さ、勘の鈍さ、厚顔にペンを執る。心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。と言う奴だ。

時々私は七絶らしきものを賦す。韻だ、平仄だ、と学のない私は何度も何度も辞書を繰る。凄く時間を喰う。自慢たらしく人に見せても唐人の寝言は褒める人も、くさす奴も殆んどいないから有難い。頭のリクリェーションそうして暇つぶしには漢詩がと自讃する。変った人だったが艸野忠石師（S13～17）を思いだす。私はこの先生に漢文を啓発され、後年になって真価を知った気がする。藤井宣雄（S2～19）吉岡喬（S14～23）両先生にも御世話になった。

当町の山奥の高山植物についてかいて見る。石南花については周知の花、説明を要するまい。我が家のそれは仲々咲いてくれぬ。

▼ドウダンツツジ―群生を御存知の方は満天星なる漢字のイメージも解って頂けよう。ドウダンは灯台の転、花の形より言うとある。標高八〇〇㍍以上の高山に群生。五、六月三―五ミリの壷状の花が葉の先に鈴蘭を寝かせた形で数個ずつ枝の彼方此方に、つつましやかに咲く。。花の色で紅、更紗、白の三種に大別する。白は外来種の由だが町内栃原ゴルフ場の奥は三種とも見られ、黒川ダム方面は紅だけらしい。花が腰にさげる胴乱に似ているとドウラン、また銅山に自生と考えてドウザンツツジという人もある。昔の東京の郊外で生垣として時にお目にかかった記憶がある。数少ない落葉躑躅の一つで春の新芽が筆先に似ているとて筆の木、筆躑躅とも呼ばれる。花はもち論葉良し紅葉良し木肌良し落葉良し、鉢にも庭木にも向く。惜しむらくは十年以上たった古枝しか花がつかぬ事である。昨年の展示即売会より俄に脚光を浴び、素人、玄人が車でどんどん持ち去ってゆくのを通りすがりに見受けるのが気になる。石南花も昔に較べて山ではウンとウンと少なくなっているそうな。

▼セッ(キ)コク―岩や樹につく常緑多年草。茎は円柱状、多数の節あり節ごとに線状の葉を互生、古い茎に葉はない。五～二〇センチの高さ。洋蘭を小さくした姿を想像下さい。花は白または淡紅で可憐、蘭科なので香りが良い。当地のは殆んど白、なお黄花石斛は秋咲きで当地にはない。庭の樫の股でいま三十

余の花が咲いて見事だ。鉢植え、水石にと色々手を変え工夫をこらして見たが年々小さくそうして終いには殆んど消えてしまうので数年前諦めて木につけたら空気植物なのか成績がよい。

町から二里半、完成間近の上生野ダムのすぐ上に数軒の魚ケ滝なる部落がある。名の通り、滝があって空気も景色もよい。滝の横手上に稲荷さんを祭った極く小さな丘があり、灌木の筈だったのに天然記念物にもなろうかと言う太いホーソー（学名あべまき）の大木が聳え、その太い一本の横枝へびっしり石斛がついていた。若しそれを採ろうとする者があると、部落の長老のCが「神罰が下る」とやっきになって実例?をあげて採らせなかったものだ。「某が帰りに自転車ぐるみ、淵に落ちて骨折、三カ月入院していた。某は帰ってみると、丁度採っている頃から赤ん坊が引きつけて大騒ぎ、、死にかかっていたので気味が悪くなり採った石斛を全部近所へ与えたので、やっと助かった。某は……。某は……ETC」　C老の家に池を作った。往診に行き池の周りに一杯石斛があるのを見て、私はからかった。

「Cさん、あんたには祟らへんのんかいや?」息子のFがむきになって弁解した。「嵐の後に行くと大きな株がバサッと落ちとるんで、拾って来るのです」「そがなら祟らへんやろ、少し持ってこいや」とニヤニヤ。事実、古木の樹皮ぐるみ落ちることがよくあるらしい。その石斛が我が庭で患者を楽しませている次第である。某年、庭の石斛の由来を得々と、患者の小母はんに話すと、真顔で「ほんとに祟ります。現に主人が石斛を採っている頃に息子が引きつけて先生に助けて貰いました。石斛は主人がみんな人にやってしまったので、子供が助かったのです」C老の話を立証してくれた赤ん坊のKも良い青年になり国鉄に勤めている。そう言えば私もその祟りか? 野の先輩である義兄が「お前見たいに気楽にやっとったらそら良いけれど、さきが案じられる」と苦笑する程、銭にならぬ事許りに精出して仕事に身が入らない。所で魚ケ滝にキャンプ場が出来て二、三年後にCが死んだ。二年足らずで石斛は姿を消した。何しろ次々にザイル持って来ての仕事だから、失くなる筈である。いまいましいがC没後の祟り話は私の耳に入って来ない神より強い奴が多い。

イワカガミ―山地林下に自生するイワウメ科の高山多年草。雪の下に似た葉で、桐に似た淡紅鐘形の花数個が五、六月に咲く草花。母の仲よしの小母さんが「姫宮神社の山で拾った。あまり可愛いので」と母に一株呉れた。大切にしていた此の小さな草花は、母が亡くなってもどんどん増える。平生放っておいて、花が咲くと「夢見たいな花や」と母が言っていたのを思いだして豆鉢に入れる。薄紫の可憐な花。生命は短かく、花が終るとまた地におろす。「夢見たいな花」母のニュアンスが何となく解る気がする。名前を調べても解らず、昨年やっと高校の先生が岩鏡らしいと調べて来てくれた。今年も珍らしがって数人が貰ってくれた。花は良いけど豆鉢の補充が骨やと家内は苦笑する。姫宮さんで気を付けるが全然見当らない。

こんなに書いてゆくと脱俗優雅な生活の様だが、実の所、一寸ぶってるだけで結構俗臭粉々である。塩見兄からの5・28野球部OB会案内も親戚の婚礼で不参、先年のOB会も出席できず世話役さんに申訳なく感じている。

今朝も生野周辺鉱害対策専門会議のS女医の再度の訪問を受けた。生野の悪名を高めたカドミの件である。大同二年以降、山名・織田・豊臣・天領（徳川）・御料局（天皇）と鉱毒は流され、加害者被害者意識の有無は別として、鉱害犯人なるジョーカーは現在三菱が握っている。職業病としてのカドミ中毒は経気道的吸入らしいが、環境汚染cdイコールイタイイタイ病なのか?、気候風土生活様式、他の重金属と色々の因子が重なりあってのイ病か?cd汚染とイ病は或は無関係か?群盲象を撫すの感を脱して、早く正しい結論が待たれる。結論が出て後、将来の町を、cd対策

を考えるしか私の手には及ばない。「他所から見舞を言われても、騒ぎについて聞かれても、あることないこと（と言ったら叱られるけど?）新聞、テレビの方が町の私より余程詳しい」としか答えようがなくて困る大部分の町民である。人々に意見を聞き、文献、新聞ETCをスクラップしてみるが、私もその大部分の一人であるに過ぎない。恥かしいが仕方がない。

クローズアップされて来た性教育にしてもSEX教育（生理衛生、テクニック、解剖学）でなく、男性たる人間とは?女性たる人間とは?を考えてつきつめて行くと、私はバックボーンがなく、一夫一婦の是非なる壁に突き当る。占有欲、経済、社会構成その他の大人的利害論で子供はすんなり一夫一婦論（之が正しいと私は思うが）を受け入れるかしら?との不安がつきまとう。私には教育の資格はありそうにない。兎に角自信を失うことばかり。

世の中が進み、人間が小?利口になって行く。「勉強して」と思うばかりで怠惰な私にはとてもついて行けそうにない。柴高半助師（T8～S10）宅にゴンタレの故に下宿していた私も齢知命を過ぎた。将軍さんも郷里鹿児島で不遇、淋しく生涯を終えられた由、二十二・三年頃と思っている。

批判を許さず、言挙げせず。「えらい人の言う通りついて来い」で脱線しては叱られながらついて行った。封建的と言われる昔、そして当時代を懐かしむのも年の故か。便利になったが考え方によっては、昔の方が気楽で、世相人心が今ほどとげとげしくなかった気がする。願わくば白城会が薄情会になりません様に。（朝来郡生野町在住・開業医）

飯田勇先生のこと

南　平（姫中51回）

私達が入学した昭和九年頃、図画の時間はビール会社の宣伝の様な太鼓腹をされた飯田勇先生であった。

五十分の授業は「お早よう」「お早ようございます」の朝の挨拶で始まる。同僚には「お早よう」目上の人には「お早ようございます」。名づけて情操の教育である。

次に万葉集の解説が十分程あり、そのあと校庭や校外の道路に出て掃除が行なわれる。竹箒、ひしゃくの使用方法まで教えられた。

本番の図画は、大体十分から十五分間であった。また土曜日の放課後は、有志により白鷺城の清掃、落書消し等が先生の指導で行なわれた。しかし若き日の私にとっては全く図画の時間は興味がなかった。

数年前東大騒動等一連の学生運動がおきたとき、私は何となく飯田先生の事を思い出した。考えて見ると絵は心を表現する。先生の情操の教育、万葉の解説、校庭の清掃等は心の教育であった。全くうかつ千万な話であるが、私は卒業後三十年近くたって、先生の教育の一端を理解することが出来たのである。最近におきたテルアビブ事件等を考えると、今若し彼等が先生の情操の教育を受けておったら……と感じる。

私が家紋を知ったのは三年生の時、先生の時間に家紋を書かされたからである。それがなかったら私の家の紋が「隅切り角もっこ」である事は今もって知らなかったであろう。これは先生の祖先崇拝の教えの一つと思う。最近さけばれる公害問題も、先生の校庭、白鷺城の清掃等、公徳心を養う教育があれば幾分でもなくなるだろう。

「お早よう」「お早ようございます」この簡単な言葉の中にふくまれた先生の偉大な情操の教育を、三十年経てやっと理解することが出来また私の愚かしさをはじると共に、すでに故人になられた地下の飯田先生のご冥福を祈り駄筆をおく。（清水建設量産部次長）

思うこと
―過去と現在―

興地琢也
（姫中55回）

このたび西岡先生はじめ係りの先生方のご努力によって発行された「白城会名簿」を手にして、今更ながら、自身が姫中を卒業してからずいぶん日が経ってしまったものだという感慨を覚える。と同時に、故人となられた先生方や、戦争、事故などで亡くなられた同窓の方々に対し、哀措の情を禁じ得ない。

私が姫中に入学を許可された時点で、日本は中国との間に戦争を起していた。その戦争は次第にエスカレートして、三年生の十二月には、日本はついに世界の大国アメリカに対して宣戦を布告した。大変なことになったものだという緊迫感を覚えたものだった。私たちの中学時代は戦争の連続で平和は一日もなかったのである。

戦時体制下の学校生活といっても、低学年の頃は比較的気楽であった。教室での授業にしても、野外の訓練にしても、大してぎすぎすしたものでなく、級友たちと楽しくすごすことができた。ところが、三―四年生の時期になると少し事情が変って来た。

ある配属将校の着任により、軍事教練が峻烈なまでに強化されるようになったからである。「明日は教練の時間がある」と思うだけでも前夜から憂鬱であり、当日の学校へ行く足どりは重かった。それだけではない。日常生活のあらゆる面にその配属将校の眼が光っていたのである。生徒の無意識的な、取るに足らないような行為すら大問題となり、しばしば冷酷な処置がとられた。ちょっとした理由で徹底的に打ちのめされ、深い傷を負った生徒たちの中に、人生の方向を変えざるを得なかった者もいると聞いている。

長い姫中の歴史の一断面である。

二

もう十年も過去のことになるが、ある日突然に知人から電話がかかって来た。二人で三週間アメリカ旅行をしようというのである。これには少し驚いたが、この機会をのがすといつ海外旅行ができるか見当もつかなかったし、意を決して、即答した。最近は海外へ行く人の数も激増しているが、あの頃は手続きも厄介だったし、三百ドルしか持参できない窮屈な時代であった。

いつかはこの狭い日本を離れて海外に行き見聞を広めたいという夢は以前からいだき続けていたし、中学時代に関心をもって勉強した英語が、実際面でどれだけ役立つものか、また民主主義の本場であるアメリカ社会の中で「自由」が現実にどんな姿をとっているかを少しでもこの目で見たいという期待をもって準備を進めた。

サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューヨーク、ワシントンなどの都会を小刻みに訪れた短期旅行は、かなりきつかったけれども、意義はあった。

アメリカの文化を考えるとき、その「国土の広さ」を無視することはできない。アメリカに関することを理解するためにはまず「言葉」の障害をのり超えなければならない。姫中時代に英語の先生から、「中学三年までのリーダーをよく覚えておれば、会話は大丈夫だ」とよく聞いていた。実際、自分の意志を相手に伝えるのに苦労はなかった。但し、相手が早口でまくし立てゝくるのを聞きとることは、はじめは困難であった。

東大英文科を卒業してすぐ母校姫中の教壇に立たれた飯盛先生（現神戸大学教授）は、

英作文の時間にはよく原書を持ってこられ、「英語をしっかり勉強し、英文学を研究するようになれば、シェークスピアその他の作品に直接触れることができる。それを通じて、その国の文化が理解できる」といって英文学研究のたのしみをご自身味わい、生徒たちにすゝめられた。中学二年生といった幼い年代に理解のできないことだったが、今になってみれば、よく了解できる。

卒業期に担任していただいた川口先生は、「英語の研究といっても、二つの分野がある英文学と英語学である。東京外語の岩崎民平先生は、英語学の大家である」とよくいっておられた。現在、研究社から出版されている「英和中辞典」は、故岩崎民平先生のご指導のもとになる特にすぐれた辞書である。

その他、国語、漢文といった文科系から、理科系の諸学科にいたるまで、あの時代に教わったことは、学科の好き嫌いにかかわらず基本的なことは割合に忘れないでいる。「ゆりかごの中で覚えたことは墓場へまで運ばれるものだ」という諺は、真理である。

三

そもそも、学問をする者にとっては、特に語学力は有力な武器になるといわれている。理科系のことについてはいう資格がないので一切避けるが、たとえば、日本史の研究には古文書、仏教の研究には梵語（サンスクリット）パーリ語チベット語漢訳仏典、そのうちの梵語の研究には英、独、仏の三ケ国が必要である。また哲学の研究には、英、独、仏、ラテン、ギリシャの五つの言語に通じることが不可欠である。ある東洋史の学研は、漢語はいうに及ばず、英、独、仏、露、蒙古、トルコ、アラビヤ語などを知っているとのことである。学者の力量は、往々にして語学力の優劣ではかられるという人さえある。

学者にならなくても、ある民族の文化や歴史を知るために、あるいは、生活そのものを知るためにそこで話されている言語に通じることが最も重なことである。ところで、さきにならべた外国語のうち、東洋系のものを除くすべての西欧語は、英語を基礎としてマスターされ得るのである。

そういう観点からいえば、私たち、過去の中学生が、単に受験参考書をある程度ものにして事足れりとしていた学習の仕方は、偏っていたし、不十分であった。教科書その他特定の参考書を精密に分析し、内容を記憶すれば、やさしい童話、小説類を手はじめに、随筆や論文類などを読むべきであった。

四

ジグザグの道をたどってやっと学校を卒えた。思えば暗い長い道のりであった。戦争、敗戦、社会的混乱、物資の欠乏など、落着いた学生生活をエンジョイする基盤などおよそなかったのである。自身についていえば、真剣になって学問を深め得なかった。

学校が終ったのですぐ郷里へ帰った。一年間家事に追われたが、やがて旅に出た。大阪のある仏教系私立学校で教鞭をとり、いつしか十年の歳月が流れ去った。

生活の根拠が大阪に移り、姫路とは没交渉になっていた。「いつも素通りしておらずにたまには寄れ」といわれたこともあったが、立寄る機会は少なかった。そして姫路の目ざましい変貌ぶりにも殆んど無関心で過してしまったことは申訳ないことであった。

大阪での生活は一年々々充実して行った。けれども、いつまでも旅に出ていることは許されないことだった。満十年勤務したところで教職を辞して郷里へ帰って来た。さて、帰って来たものの、親しかった同級生や、交際のあった人々とあまりうとくなっていたのでばつも悪いし、しばらくの間、同窓の人々と

会うことを遠慮していた。

しかし、同窓の人たちは、何のこだわりもなく自然に受け容れてくれた。

時の流れのきびしくへだてたものを汝の魔力は再び結び合わせる
汝のやわらかい翼のゆれるとき全ての人は兄弟となる（シラー）

詩聖シラーの詠んだものをベートーベンは第九交響楽の最後のコーラスの部分で力強く表現した。以前にはよく聞いたものであったが時々思い出しては味わっている。

五

数年以前から郷里の家島に於て、教育委員として、教育行政の仕事にたずさわっている。人口僅か一万人余の小さい町であるが、所管の学校が六つもあり、学校建築、教職員の任免、移動、教科書採択、その他、仕事は可成り多い。

教育行政の仕事内容は、現場の教師のそれとは少しちがっている。けれども、「教育とは何であるか」「人間形成とは何であるか」という本質的な問題でなやまされる。

人間形成のためには読書をすべきである。特に古典を読むべきであるとよくいわれる。これには異論はない。しかし、私たちは、精神を養うところのこれらの書物をどう読むかである。ある人は多読をすゝめ、他の人は精読をすゝめる。どちらもすゝめる人がある。

教えられたことを努力して記憶し、絶えず読書を続けておれば、博学の人となることはできる。ところが、博学（博識）の人が、知恵ある人、賢明な人といえるかどうか。両者は往々にして一致しない。そこで、書物を読んでも「考える」ことをなおざりにしては、意味のないことになる。

また「教育」については、一　少年をみちびく（ペダゴゴス）　二　ひき出す（エデュケーション、エルチーウンク）の二種の語に由来するようであるが、まず、教育は、時期的には、若い時がより適していることをペダゴゴスという言葉があらわしている。それから、潜在能力を「ひき出す」ことは「考えるということなくしては困難なのではないか。

パスカルは「パンセ」、デカルトは「コギト」、ショーペンハウエルは「デンケン」という言葉を投げかけて、私たちの眠れる心をよびさました。何れも「考える」という意味に相違はない。

過去に於ては、教育は、先生の教えることを生徒が覚えるということの繰り返しであった。現在および将来の教育に於ては、先生は単に教えるということでなく、生徒に対していつ、如何に刺戟を与えるかであり、生徒は先生から受けた刺戟によって、如何に「考える」かに向けられるべきではないだろうか。

（家島町在住徳号寺住職）
（同町教育委員長）

白城会文庫目録追加分

（S46・7～47・5）

山崎　為人（姫46回）
○俳詩「門」創刊号～第五号
尾田　稲子（西13回）
○愛しのタンザニア
高橋　三郎（姫50回）
○福音信仰の政治性
〃　○キリスト信仰の本質
〃　○キリストの権威と日中問題
泉　鴻之共著
窪田　清（西14回）
小山　一平共著
○IC回路ハンドブック
石川　一夫（姫33回）
○碧眼の良寛
〃　○英文ベイカー物語
UNCLE BAKER
稲葉　明彦（姫50）○日本動物解剖図説
白城会　○白城会名簿昭和四十六年度
小松均・勝原晴希・神崎繁（西23回）
原田博司・小嶋菜温子　○同人詩「やまかひ」創刊号

「古典中学」の伝統

阿部良雄（西高3回）

外国の文化や文学を研究する者の多分にもれず、話が得てして外国に関することになりがちなのを許していただきたい。フランスの中等教育は古典教育、技術教育、一般教育の三種に分れるが、その中で「古典教育」分野を受けもつ「古典中学」（リセ・クラシック）が、おそらく、旧姫路中学のような旧制中学及びその伝統を受けついだ姫路西校のような学校に近い存在であろうと思われる。

制度的に言えば「古典中学」とは高等教育への準備過程であって、その出身者の大部分は、大学の諸学部、あるいは、官吏・技師・教育者などを専門的に養成する高等専門諸学校（グランド・ゼコール）に進学する。しかし、注目すべきはむしろ教育内容である。「古典中学」の「古典中学」たるゆえんは、ラテン語（およびギリシア語）の教育を通じて西欧世界の古典に親しむ機会を与えることだった。それはわが国における漢文教育にもなぞらえられるべきものであって、「フランス語で立派な文章を書くためにはラテン語の素養を積まなければならない」と考えられていた。むろんのこと、近年、産業社会・技術社会の要請にこたえて、そうした無用の死語を学ぶよりは直接役に立つ英語やドイツ語、ロシヤ語、スペイン語、中国語（さらには日本語）を習得すべきであり、科学技術の基礎としての数学や物理の教育により多くの力をそそぐべきだとする実用主義的思想が有力になったことは、日本の場合と事情が似ている。にもかかわらず、根本的な意味で「古典中学」の精神、伝統が失われたとは言えないのである。

その「伝統」とはいったい何だろうか。それは、実用的な知識・技術の習得を第一義としないで、ものを自分で考える能力の養成を主眼とする、ということだと言っていいように思われる。たとえば、フランスの教員は、生徒たちの書いた文章を読んで全体についての評言を与え、細部にわたって内容・表現について注意を与える作業に多くの時間をついやす。それは、自分の思想を表現する能力の養成、書くという行為を通じて自分自身の思想を練り上げる習慣の育成が、重要なことと考えられているからだ。一言でいえば、出来合いの答いくつかの中から正解を即座に選び出すことのできるコンピューター的人間をつくり上げることを目的としてはいないのである。

しかし、人間はゼロから出発して自分の思想を虚空に築き上げるものではない。「神は存在するか」というような宗教的問題、「時間とは何か」というような認識論的問題、あるいは「幸福はいかにして得られるか」といった論理的問題――これらは思いつくままに挙げた例にすぎないが、そうしたもろもろの問題についてわれわれが思案する時、同じ問題とすでに取り組んだ先人たちの思案のあとが参考として大いに役立つことは言うまでもない。フランスの教育において、古今東西の哲学者・文学者の文章を学ぶことに大きな比重が与えられているとすれば、それは、それら先人たちの思想を「知識」として頭脳に収納するためではなくて、あくまでも自分自身の思案および表現の力を養うための助けにするのだという考えが基本にある。

むろん、フランスの中等教育に学ぶ学生たちのすべてが、そのような理想的目標を達成

するわけではまったくない。しかし、「古典中学」の理念そのものは、われわれにとってなお示唆に富むものをもっているように思われる。先人に学ぶということは、単に考え方表現のし方のテクニックを学ぶということではなくて、人間が人間であるために欠くことのできない価値的判断の基礎を身につけることでもある。たとえば、今日にわかに意識されるようになった「人類の危機」は、人間が自然に対する関係においておかしてきたさまざまな選択の誤りの積み重ねから由来するものであると思われる。とすれば、古来わが国の詩人や文学者が自然と人間とのあいだにどのような調和的関係を感じとりあるいはつくり出そうとしてきたかを学ぶことは、「美的体験」を通じて、あるいは人類救済に通ずるかも知れないひとつの知恵を身につけることであり得るだろう。それは迂遠な道であるかもしれない。しかし、今日の人間にとって最も必要なことは、物質的次元においては技術万能主義によりかかり、精神的・情操的なものは付加的な「趣味」ないしは「ぜいたく」の部類に属するものとみなす、という二元観を脱却すること、言いかえれば、それ自体が目的であるかのように錯覚されるにいたった技術的・生産的活動を、価値観的判断を含んだ思索や体験に従属させようと努力することではないだろうか。国際的に「エコノミック・アニマル」の汚名をとったわれわれ日本人が人類に今後なんらかの貢献をなし得るとすれば、逆説的なようだが、人間の精神的・情操的満足が自然の尊重につながるような生活のし方の模範を提示することによってでありそのためには、古典に学ぶことがきわめて重要な今日的意義をもつのである。

「価値観的思索能力の養成」を誦ずるつもりが、少々大げさなことになってしまったが私自身の経験をふり返ってみても、根本的なところで自分の思索能力や価値判断を支えているものは、中学、高校時代にすぐれた先生方の授業を通じて得た「ものの考え方」であり、とりわけ、国語や漢文の「古典」から受けた感化であると断言していいように思う。それは、今から二十年前には大学受験勉強もそれほどシステム化されていなかったおかげもあったとするならば、われわれ大学教育にたずさわる者は、断片的な知識を数多く収納した人間ではなくて自分自身で考え判断する人間（知識を自分自身の思索や判断に役立たせる人間）にとって有利な方向へと入学試験の性格を変えてゆく努力を放棄してはならないと思う。しかし、さまざまな制約にもかかわらずわが母校になおひとつの「伝統」が生き続けているに違いないと感ずることは、旧制姫中からの転換期を良き時代として体験した人間の郷愁にすぎないものでは決してないだろう。近年大学入学試験合格者数に関して公立高校が一部の特殊な私立高校におされ気味であるのは、教育の機会均等という民主主義的な理念から言ってもまことに遺憾であり、私としても「受験を無視した教育」を説こうとは全く思わない。しかし、それが「らくだが針の孔を通るようなせまい道」であっても、受験における成功と思想的・情操的な涵養とを両全させる道はあることはある、と確信しているし、またそのような困難な道を敢えて選ぶ勇気を与えてくれるものこそ「伝統」にほかならないであろう。

（フランス文学者・現在東大教養学部助教授）

青年の船に乗って

鳩川　晏弘
（西高9回）

私は、この六月一日から十四日間、船に乗った。正式には「第二回JCアジア青年の船」という。日本青年会議所が主催したものである。船はコーラル＝プリンセス号、一万トンの英国船である。それに、日本各地から集まった四百人近くの団員と、運営委員、リーダーとして約五十人の青年会議所員、他に講師通訳らが数名が乗り込んだ。五月三十一日、大磯のロングビーチホテルでオリエンテーションの後、六月一日横浜から出港した。

参加の動機

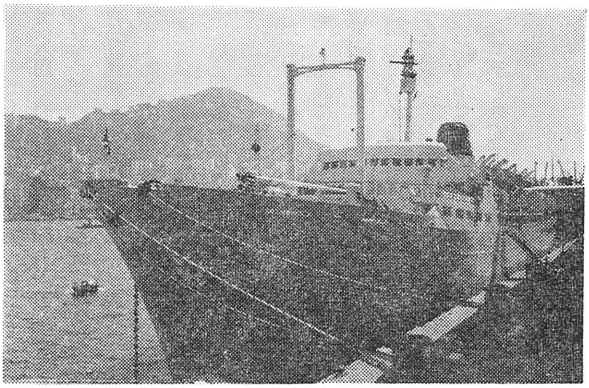
私が、なぜ半月も学校の勤務を休み、この船に参加したか。いろいろ理由を挙げることができる。とにかく一度日本を離れてみたい、豪華な船で、空と海としか見えぬ世界の所に行ってみたい、それは、幼いころからの夢でもあった。しかし、ただそれだけのことならこの時期に、私はあえて、この船に乗らなかったろうと思う。

私は、今三十三歳、西高の勤務も、もうすぐ十年になる。学校の仕事も一応のみ込めたし、家庭での生活も一人の娘を中心に平和そのものである。とりたてるほどの不満は何一つない。しかし、私の心の中には、何かあせりに近いものが、近年とみに高まるのを、私はたびたび意識してきた。自分は、この毎日の中に満足を見出し、このまま日々の充実を目ざしてさえいればよいのだろうか。そして教師という世界しか知らず、その限られた環境の中で、このまま黙々と歩んでいっていいのだろうか。なるべく若いうちに、少しでも広い世界を見たい、広い人間を見たい、それが自分のこの船に乗る根本的な動機であった。

いま一つ、あえて加えるならば、こんなこともある。私は、職業柄、現代の若者を、上や外からは比較的よく見ている。しかし、そういう見方ではなくて、若者と同じ仲間になり、若者と触れ合って、内から彼らを知りたい。しかも、高校生という単一的集団ではなくして、地域も、職業も、年令も異なる若者を。

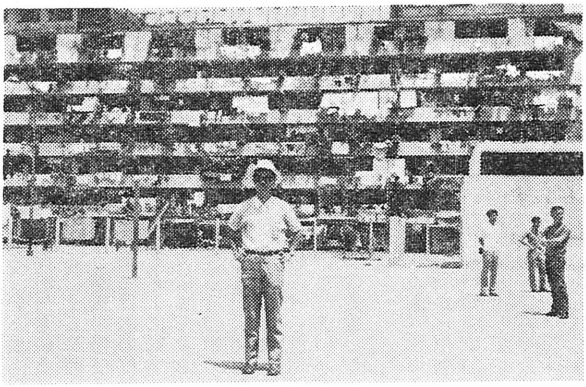
断絶は本当にあるか

出港の前日、大磯でのオリエンテーションにおいて、四百名近くの団員は、三十数名から成る十二のブロックに分けられた。そして各ブロックには、JC（青年会議所）メンバーがリーダーとして三名ずつ配属された。各ブロックはさらに四班に分けられた。そこで自己紹介。わがブロックの団員は、十八歳の一人以外全部二十台。それも当然のことで、二十台であることが参加の条件でもあったの



香港オーシャンターミナルのコーラルプリンセス号

だ。それを、私は、姫路青年会議所の友人である柳谷君（西高九回）らの骨折りで、やっと乗ることができたのだ。団員の平均年令、二十三、四歳、私とは十歳もの隔たりがある。私は何か場違いな所に踏み込んだとまどいを感じた。彼らも後で私に語ったところによると、実は、一世代も違い、妻子ある高校教師なんて、いやな奴と一緒になったもんだ、よくもずうずうしく青年の船に乗り込んできたものだ、思ったということである。それも無理もない気持だと自分でも思う。しかし、そんな彼らと最後の別れでは、お互いに「「お世話になりました」「ありがとうございました」「ぜひ遊びに来て下さいよ」「困った時には飛んで行くから相談に乗って下さいよ」と握手を交わした。久しく流すことのなかった涙を流すこともあった。帰港前夜の表彰式において、最初けむたがられた私が、よく仲間の融和をはかり、ブロックをリードしたということでFriendship Awardを与えられた。その色紙を、盾が私の青春の船旅の記念碑としていつまでも私の部屋に飾られることになると思う。



難民アパート

何がこんなにまでわれわれの心を結びつけたのか。今少しゆっくりと深く考えてみたいただ、その時ほど断絶ということばを虚しいものに感じたことはなかった。

船内生活第一歩

さて、話は、船が港を出た第一日目、六月一日。宇高連絡船ぐらいがこれまで乗った最大の船である私にとっては、船内のすべてがめずらしい。乗組員は、Purserを除けば外国人。上級乗組員は英国人、甲板や船室の掃除をしたり、食堂関係は全部中国人らしい。それに、そのどちらでもないのが数人いる。私の部屋は、C-23一番底のデッキにある二人部屋である。今日から相棒となる中島君と一応荷物の整理をして船中のバーに行った。まずそこでドルと英語の使い初めである。私は英語は全くダメ。とにかくメニューを見て、Orange Juiceと注文して、How much?で金を払い、まずは成功。何となく自信がわいてくる。（たわいもない自信である）

船の中には、昨日初めて顔を合わせたものばかり、同じ姫路青年会議所から参加した青木君以外に誰一人として知るものがない。しかし、自分の心の中に、不思議な変化が起っているのに気がついた。日頃初対面の人に対して、ひどく臆病な私が、側の人誰でもに実に気楽に話しかけることができ、名刺を交換し、握手をし、「よろしく」、それでもう旧知の親友のごとくに振舞うことができるのだ。そして、この船の生活において、この物怖じしない態度はそれからずっと私を支配した。団長を囲む座談会に出席するメンバーの選挙にも立候補してスピーチをやり、代表にもなったし、百人余りを集めて自主討論会を開きその司会もやった。そしていつのまにかブロックの代表のような立場に立っていた。

研究活動

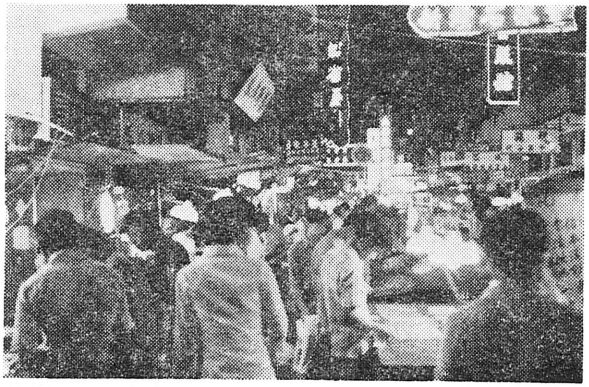
観光旅行でない、われわれの船での生活はかなり強行なスケジュールであった。朝の体操から始まり、評論家や大学教授をはじめとする講師による講議もビッシリ詰まっていた。しかし、われわれの研修の本番は十一時の消灯後であった。それ以後は船中をうろつくことは許されない。そこで三々五々、いや時には十人余りもの仲間が、狭い部屋に集まってくる。そのまん中には日頃口にすることもないジョニ黒が三本四本と並んでいる。そしてタバコはケント、ダンヒルといった調子である。議論は二時三時、四時までも及ぶこ

とがある。ミカン園を経営している者もいる電気関係の技師もいる。市役所員もいる。デザインをやっているのもいる。そこに時々女性が加われば議論はいっそう熱気を帯びる。話題はアジアの現状から将来、日本の位置と役割、青年の船の意義やリーダーに対する不満はては恋愛論からセックスにまで及ぶ。睡眠時間は三時間、四時間はざらで、中にはそのまま人の部屋で寝入ってしまい、朝帰りを常とするものまで出てくる。こんななかでこそ、私に対する違和感も払いのけられ、「いつか、ぜひ遊びに来て下さいよ」といってくれる友情が育っていったことは間違いない。

香港でみたもの

こんどの船旅の寄港地は、香港、マカオ、沖縄。香港からは、アジア各国から招聘された青年が乗り込んでわれわれの仲間に加わり船中は、また違った色彩を作り出していったし、沖縄では彼らを含めたアジア青年会議に出席して複雑なアジアの現状についていろいろの感想を持ったが、ここでは私が香港で見今も思い出しては胸のしめつけられる思いのすることを二、三書いておきたい。

香港滞泊最後の日、六月七日朝から全員、九龍、新界のツアーに出発した。その途中、難民のアパートを見た。中共からまさに命からがら、着の身、着のままで逃げてきた人達の住んでいるところである。遠くから見れば七、八階建ての立派な団地である。ところが近づいてみると、その不潔さにまず目をそむけたくなる。聞いてみると、四畳か四畳半の一部屋が一家族で、平均して六人がそこに住んでいるという。中には八人も住んでいるのがあるという。さして高くない天井だが、二段のベッドがあり、文字通り家族が重なり合うようにして寝るらしい。外からのぞくと、ほとんどの部屋に写真が飾ってある。おそらく、中国本土と離れ離れになった肉親ででもあろうか。

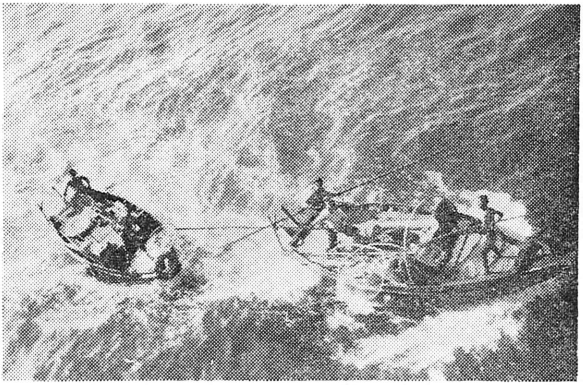


混雑する路店街

その前夜のことであった。私と中島君は、香港名物の二階建てのバスに乗り込み、ネイザンロードへ出かけた。大通りは、国際都市の中心地にふさわしく、いかにも華やかである。われわれ二人は、表通りとビル一つ隔てた裏通りへ足を入れた。そこには路の両側に何百メートルと路店が並び、その間の通路は三人がやっと並んで通れる程度、人でごったがえしている。そこには何百、何千個のオメガやロンジンを並べた時計屋がある。新聞紙の上に三足か四足、それも新品か古物かわからぬ靴を並べて、地べたにすわり込んでうつろな目で番をしているものがある。六月は雨期である。むっとする暑さである。

さて、話を再び逆して、九龍、新界ツアーの時のこと、われわれは中共との国境の見える小高い丘に行った時のことである。そこには、十人ほどの民芸品のみやげ物を持った小学生ぐらいの女の子がうろうろしている。私達を見つけるや、寄ってきて「千エン、千エン、三ドル、三ドル」と日本語で、品物をつき出す。一旦、そのその品物に関心ある態度を示すと、絶対に側から離れない。ある仲間がその一人につかまり、私に助けを求めてきた。そこで私が側から英語で「彼女はすでにたくさん買ったからもういらない」とことわってやると、その途端にモーゼンと私に襲いかかるようにわめきたてた。ことばはわからないが「お前にいっているのじゃない、よけいな口出しするな」ということらしい。その剣幕たるや恐怖を覚えるものであった。その光景をメンバーの一人が写真に撮ろうとした。するとこんどは彼に向かって一ドルよこ

せという。モデル料ということらしい。またメンバーの一人が、三ドルというのを二ドルに値切って買った。金も渡し、品物も受けとった。だのに、あと一ドルよこせといって



甲板から投げる硬貨を必死に受けとめる

側を離れない。ついに、われわれのバスが出発するまで彼から離れなかった。

そういえば、私自身、前日マカオでこんな体験をした。大通りのアクセサリー店で買物をしていたら足の悪いらしい靴磨きがやってきて、足を引っぱり靴を磨かせるというジェスチャーをする。How much? と聞くと一ドルという。マカオ貨幣で一ドル渡すと磨き出した。ところが片方を磨くと、もうすんだといわんばかりに横を向いてしまう。Shine といって左足を出すと、一ドルをよこせというNo! というとまた横を向いてしまう。片方だけ磨いた靴はどうしようもないから、One dollar, OK. というと再び磨き出した。磨き終えるのを見はからって、私はI have no money. というとそれ以上要求しなかった。

六月七日、わがコーランプリンセス号は、香港、オーシャン＝ターミナルを離れた。船がゆっくりと岸壁を離れるとき、どこからか二艘の小舟がやってきた。水上生活者らしい小さな舟だが、父親、母親、それに子供、箱の中に眠っている幼い子もいる。その二つの舟から甲板のわれわれに向って、必死になって金を投げてくれと叫ぶ。父も母も子供も必死である。誰かが舟に向って投げると手にした網でたくみに受ける。小さい舟は木の葉のように揺れている。また誰かが、舟から遠くに硬貨を投げた。すると一人の少年が瞬間に海に飛び込み右手に握って舟に上がる。私は甲板から金を投げる仲間に腹が立った。その神経が理解できなかった。しかし、もし、彼らに一枚の硬貨も投げ与えなかったら彼らは今日一日をどう生きるのだろうかとも思って胸が痛んだ。

やがてわがコーラル＝プリンセス号は次第に速度を上げ次の寄港地沖縄へと向かった。

おわりに

この船の中の団員の空気は、大きく見て、三段階に分けることができる。最初は、初めて豪華船に乗り、初対面の人とことばを交わす、華やかな楽しさがあった。ところがしばらくすると、JCメンバーに対する不満、ツーリストへの抗議、仲間同志の対立、批判が募り出す。しかし、旅も終盤に入ると、再び来てよかった、参加してよかったと心から思い出し、ほとんどの者がそれを口にする。それまでは不平不満をぶちまけてきたツーリストの人を招き共に酒を飲み、感謝の気持を述べ、彼が感激のあまりワーッと泣き伏すという一幕もあったし、それまで団員に小言ばかり並べてきた団員担当本部長が最後の挨拶に立ち、絶句してしまい、団員に向かいありがとうございました、と一言いって顔を伏せてしまうこともあった。

この移り変りを今想い起すと、一つのドラマである。何が、この感動的ドラマを成功させたのか、私は今、しきりにそれを考えている。

（終）一九七二・六―十八

（母校教諭・白城会理事）

姫中西高野球部
O・B会の集い（報告）

五月晴れの五月二十八日、二年ぶりでOB会を母校の白城会館をお借りして開催しました。消息の判明している方々約百二十名に案内状を発送しましたが、諸兄には遠路とご多忙のため集りが少く淋しい会合になるのではないかと心配していました。大先輩の芥田氏、柴垣先生、本校が全国選抜大会に出場した前後の黄金時代の面々の集りだけあって青春時代に若返り、勝った試合、負けたゲーム、30～40年も前の事なのにアウト、カウント、ホールカウント、審判員は誰、相手チームの選手の名前等、昨日ゲームを行ったように鮮明な記憶で話に熱が入り時の経つのも忘れました。特に東京より遠路30年振りで山下君、また西高より唯一人参加してくれました奥平君に感謝する次第です。毎年開催する予定ですので次回から是非多数の参加をお願い致します。当日参加された面々のご紹介で筆をおきます。

芥田武夫(33)　在学中捕手、投手で四番、進学後早大主将、プロ野球団近鉄監督、社長、現在野球評論家に逆もどり全国的に有名人

柴垣武夫(34)　名部長、陰の力大、昭和11年選抜大会出場の際校歌がないので応援歌で代用、指導され語り草になる。現在兵庫女子短大教授。

淵岡美土磨(31)　第3回大会準決勝に進出した時の五番三塁手として活躍現在関西興業㈱

丹羽　助(36)　第9回大会に決勝戦に進出の時の二番でこの試合唯一の安打を打ち三打点をたたき出し二塁手、当日の新聞に正三塁手の永井がシートノックで負傷し戦力が低下、甲陽中学に4－3で惜しくも敗れ優勝を逸したと書いてある。その年甲陽中学は全国優勝している。氏の兄さんが第6回全国優勝した関学中の遊撃。現在熊谷組顧問。

山本秀雄(41)　後に黄金時代となるが氏のスカウトが貢献していると聞く野球一家である

三木龍仁(50)　（御影工業の部長兼監督）令息良君西5）もOBである。現在姫路鉄工団地協同組合。

鍛治川弘祥(47)　黄金時代の主将センターで四番、長打力ありモーレツなファイトマン第21回大会に優勝する実力がありながら準々決勝戦で育英商に8回までリード、一瞬の不注意で敗退、早大に進学ゲーム前に塩をまいて行ったものだ。現在共進パッケージ㈱、大起紙業㈱共進開発㈱を経営。

先水清(41)　俊足の持主、城南小学校時代神宮で行われた全国大会に優勝した経験もあり投手以外のポジションをこなす万能選手。現関西電力㈱。

釣　常雄(48)　小学校時代より有名投手第三回選抜大会出場の原動力となる。一年生より投手として活躍、関大に進学後強連球を投げ東京六大学を総ナメにし阪神タイガースに入団、在学中は優等生、時の横田校長より運動と勉学を両立させたと賞讃される。現在関西電力㈱。

長尾俊郎(49)　俊足好打好守の一番打者遊撃を守り選抜大会出場の一員、後山下と交互に投手をやる。横浜高商に進み全国高専大会で大活躍母校のコーチを勉めたこともある。

山下　勝(49)　強肩三塁手、選抜大会には三番で捕手で出場釣投手の後をうけて投手、兵庫大会にも長尾とマウンドを守り好成績を収め立教大に進学大活躍、立大OB会長。現在山下ゴム㈱経営。

塩見一郎(49)　釣投手の捕手をやっていたが強連球を受けかねて故北条監督によく怒られたが選抜大会に一塁手として出場、後40回全国大会に姫路南高校の監督として出場し三回戦まで進出。現在龍野実業高校。

奥平耕三（西19）在学中三塁手で一番打者、熱心に練習するも指導に恵まれず好成績を残せずとも青春に悔なし慶大に進学。現在松下電工㈱。

支部だより

県庁支部

去る六月二日（金）、午後七時より山電須磨駅北にある青葉荘にて県庁白城会の総会が多数の参加者を得て盛大に行なわれました。

四十七回の村山勇次氏（民生総務課長）を中心として五十回の戸谷松司氏（土木部長）同じく上月茂氏（中播福祉事務所長）などの強力な推進力に加えて五十八回鷺沢衛也氏（人事副課長）、六十二回土師幸治氏（総務部人事課主査）などのこまめなお世話によってさわやかな須磨山の一角で歓談尽きることなく、夜のふけゆくままに「鷺山に秋の……」を放唱して大いに気炎をあげました。

今回の会合には五十三回の井上安友、五十七回の清元功章両県会議員の顔も見え、本部からは橘義康校内理事（五十八回）も参加させてもらいました。

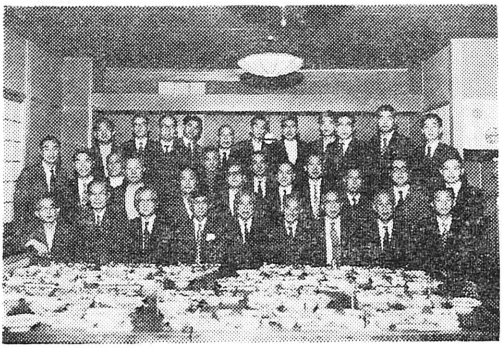
なお、県庁白城会の会員名簿、新たに整理されて鷺沢氏のもとにあるので、必要の方は問い合わせてください。

加古川・高砂支部「麓松会」

加古川・高砂支部「麓松会」だより

東播地区、加古川近郊の「麓松会」は、さる五月二十日　加古川駅前「亀市」にて、支部会を開きました。本会の世話を永らくしていただいていました松本佐一郎氏（姫中26回）の故くなられた後、30回の伊達芳信氏を会長に推し、約四十名余、まことになごやかな集いをもちました。簡単ですが支部だよりとさせていただきます。なお、当日の写真を送ります。

（佐野記）



母校職員の異動

（昭47年度）

▽離任された先生

お名前		転出先
北沢　芳信	（英）	姫路東高
三浦　静江	（養）	姫路東高
中原　光	（数）	龍野高
松本　敏和	（体）	加古川東高
浜田　好郎	（事務）	城北高
広瀬　広	（国）	明石北高
前田　肇	（書）	退職
吉田　俊子	（家）	〃
井口　隆	（国）	〃
石間　孝	（事務）	〃

△来任された先生

お名前	科目	前任校
戸田千鶴子	（養）	姫路東高
寺本　政江	（事務）	龍野高
山下　駿	（英）	姫路東高
井上　敏弘	（書）	姫路商業高
田淵　俊介	（国）	龍野高
建石　道男	（体）	加古川東高
原　紀子	（数）	飾磨工業高
井上　国弘	（事務）	夢前中
田中　真澄	（家）	松陽高
藤川　宗暢	（国）	赤穂高

昭和四十六年度版「白城会名簿」購入のすすめ

会員各位より、ご期待と催促をいただいていました「会員名簿」がやっとできあがりました。年の瀬も迫った十二月三十日でした。会員総数一六、五六九名の消息判明分を集録しております。できるだけ多数の同窓の方々にご購入いただきたく存じます。同窓生の座右には同窓会名簿を！とよびかけたく存じます。

名簿の刊行にあたりまして、広告掲載にご協力いただいた方々、試料の収集に尽力していただいた母校の教職員、卒業生各回幹事、地方支部の役員の方々の母校愛校心などの温まりを有難く存じております。紙面をかりまして各位に厚くお礼申し上げます。

名簿ご希望の方は左の経費を郵便振替用紙等で本部までご送金下さい。

一冊印刷実費　七〇〇円

郵　送　料　二〇〇円

なお、名簿印刷中、諸般の事情のため、落丁、誤植等ができましたことを深くお詫び申し上げます。特に強く追加訂正補植のご指摘のありましたもののみを左に追補させていただきます。

訂正のための情報（個人）

以上、特に訂正要請の強かったもののみですが僅んで訂正させていただきます。

なお、右記以外の誤植、落字等見つけだして居りますが省略させていただきます。

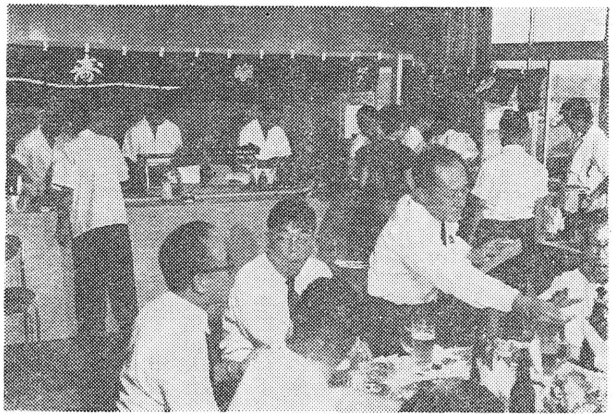
次回名簿の正確を期しています。

昭和四十六年度

白城会総会報告

昭和四十六年度白城会総会は八月十五日（日）午後一時より、母校の白城会館で盛大に行なわれました。例年のごとく　安平理事長より開会の挨拶、物故会員に黙祷をささげ、会務会計の報告等議事を終え、「兵庫県の展望」と題し　県企画部長戸谷松司氏（姫中五〇回・現土木部長）より開けゆく郷土の実態についての話を、種々の資料をそえて聞かせていただきました。講演後の宴会ですが、本年度は特に趣向を更え会場内に「寿司屋台」をくみ「やき鳥」コーナーを構え、「生ビール」を抜き、好みのものを自由にえらべるよう仕組みました。総会の魅力の一ツにと考えました苦肉の策……。参加の方々からは大変好評をいただきました。折角の同窓会員相互の親睦の場ですので、大いに活用いただけたらと存じます。特に西高校になってからの卒業生の方々の参集されるのを期待してやみません。

末筆ながら本総会の運営にご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。



（総会風景）

昭和46年度白城会会計報告（自昭45.8.1 至昭46.7.31）

項目	収入	支出	残額
一般会計	4,550,803円	2,378,662円	2,172,141円
白城会館運営	135,006円	0円	135,006円

上記監査の結果正当なものと認めます。

昭和46年8月11日　監査　岡本徳治郎

監査　竜田謙三

以上の通り報告いたします。

昭和46年8月15日　理事長　安平　康

白城会総会ご案内

昭和四十七年度白城会総会を左記の通り行ないますので多数の会員の方のお集りをお待ちします。年を経る毎に、盛大で内容の充実した会合に盛りあげて行きたく存じます。

姫中、西高の卒業生の方々、同窓一堂に会し、老若を越え、和らぎの場をつくって下さい。なお、準備の都合もありますので、出欠のご連絡を頂きますようお願いいたします。（同封葉書にて是非ご連絡下さい。）

日時　昭和四十七年八月十三日（日）
　　午後三時より
場所　母校内　体育館
会費　一、〇〇〇円（但し西高二十一回～二十四回生は五〇〇円）
講師　結城令聞氏（姫中三十二回卒・京都女子大学学長）
テーマ　「　　」
受付　午後二時三十分より（会場入口にて）

「維持会費」納入についてのお願い

現在本会の会計は従来よりの「積立金」と母校姫路西高校在校生が月々分納入している「入会金」と、卒業生会員の納入される「維持費」とで維持されています。卒業生の会員の皆様方からは「維持会費」として、年額百円ずつ送付頂きたいのです。新入生の入会金のみに頼るのは甚だ心苦しいものです。同窓の方々もふるって「維持会費」をご送付下さいまして、私達の白城会を充実した会に盛り上げて頂きたく存じます。

「維持会費」は三年に一回、三百円を納入して頂くことにしております。未納入の方は是非とも会費納入をお願い申し上げます。同封の振替用紙でご送付下さい。諸般の事情ご明察の上送金頂きますようお願い申し上げます。

表紙は多摩美大の今井信吾先生の作品です。
（独立美術家協会所属・西九回）

編集を終えて

毎年一度七月に発行しておりますこの通信も本年は第九号になりました。

お忙しい方々に原稿を依頼し、心よくひきうけて下さったおかげで、何とか例年通りの通信を作ることができました。十分な時間をかけて編集・校正できなかったために、いろいろと読み苦しいところもあるかと思いますが、お許しください。

今後も、できる限り多くの記事を載せたいと編集者一同努力しております。会員同志の意見交換の場としても、どしどし皆さんの自発的な投稿をお願いいたします。また本紙に対するご意見、ご助言をお待ちしています。

No. 9　昭和47年7月
題字は空地純一氏
白城会本部
姫路市伊伝居678
（郵便番号670）
姫路西高等学校内
理事長
編集人　橘　義康
　　鳩川晏弘
　　家永善文
印刷所
明輝堂印刷
姫路市総社本町81